

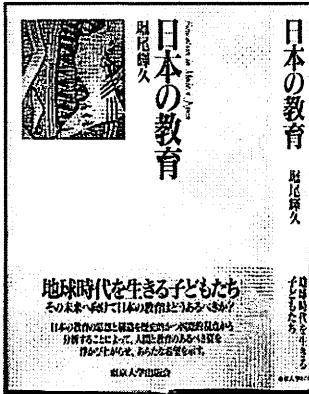
## 【図書紹介】

堀尾輝久著

# 『日本の教育』

(旧6版)四一六頁  
東京大学出版会

吉田武雄



これは、戦後五十年の教育課題を明らかにする最適の書だと思えます。

この書は、著者が東京大学を退任する最後の学期に、十三回にわたって行なった特別講義と一九九三年三月一日の最終講義の記録です。講義の意図するところは、次の通りです。

「一九四五年を思考の座標軸とし、戦後の開国と改革がいかなるものであったかを、一、それが否定した戦前日本の教育、二、改革時の国際関係と改革が参照した欧米の近・現代の教育、三、戦後教育史の流れと戦後改革評価の推移の三つの視点から、歴史的・構造的に明らかにしようとした」(はしがき)。

構成は次の通りです。

### 序 思考の座標軸

I 現代はどんな時代か

— その断絶と連続の構造

### II 改革の進行

### III 国家と教育

### IV 経済と教育

### V 教育の自由と公共性

難しい専門書とあって取りかかったのに、非常に読みやすいのに驚きました。

ひとつの理由は講義の忠実な記録だからです。例として、序の6 憲法九条の意義、幣原のイニシヤティブ、から引いてみましょう。これはまた、もっとも興味を惹かれた箇所の一つです。

「戦後の日本国憲法は占領軍によって押しつけられたものだ、ということがよく言われます。その制定過程を丁寧に見れば、少なくとも、日本政府の内部につくられた憲法問題調査委員会(松本委員会)が非常に遅れた議論をしていたことは事実です。これではとても保守的の間尺に合わない。△敗戦国日本が世界の他の国々に対して、恒久的平和への道を進むについての精神的リーダーシップをとる機会▽を生かすためには、思いきって左に急旋回(レフトスイング)した憲法をつくらなければだめだ」というのが占領軍の意識でした。そういう意識のもとでマッカーサー草案がつけられた。これは事実です」。

「しかし、憲法九条にかんしてはだれ

がイニシャティブをとったかというところ、マッカーサーではないのです。幣原喜重郎という当時の総理大臣でした」

「幣原という人は、戦争拡大に反対していました。さらにヒロシマ・ナガサキという事実を前にして、これからの日本は戦争をしないといけないんだ、と考えた人でもあるのです。しかし、他方で天皇制を守るという強い考え方をもっていた人でもあるのです」。

そしてそれに関連する当時の国際的状況を述べて、次のように結論づけています。

「そういう状況ですから、天皇制がどうなるかということとは日本の政治家たちにとっても非常に真剣な問題であったわけで、とにかく天皇制を守ることと憲法九条的なるものがワンセットで考えられていた、というのが歴史の事実です」。

著者は、日本の現代は一九四五年から始まるとし、それはまた世界的な意味においても「地球時代の始まり」という歴史区分の出発点でもあるとします。そ

してまさに「地球時代」にふさわしい人間と教育のあり方を探求しているのが本書です。

「日の丸」問題についても改めて視座を得た思いです。次の主張です。

「『日の丸』にかんしては日本のネーションのシンボルとして認めていいのではないかという個人的見解をもっていきます」「過去の侵略のシンボルだったからだめだ、というのではなくて、われわれはまさに過去の侵略の歴史を背負ってしか生きていけないわけですから、過去の歴史を背負いながら新しい決断、新しい選択をした、それが日本なのだ、と私は思います」（もちろん、行政府が学校に「日の丸」を強制するのに賛成してはいません。―吉田）

一九五〇年代から「日の丸」の強制に反対してきた日教組が、九五年度方針からそれを棚上げにする今日の状況下で、良心的な教員はこの立場でなら積極的な「国旗」の教育が可能でしょう。

この書は、私には教育事典的な役割も果たしてくれます。例えば、メリトクラシ

ーの正確な意味を知りたいとき、事項索引を見て該当の頁を読みます。そうして歴史的で構造的な概念がえられます。人名索引も役立ちます。

魅力のひとつは、著者が自分史の視点をもって記述していることです。最終講義はとくに同年生れのわたくしには興味深いものがあります。

この本の帯に「日本の教育の思想と構造を歴史的かつ国際的視点から分析することによって、人間と教育のあるべき姿を浮かび上がらせ、あらたな希望を示す」とある通りの書物です。

（にいがた県民教育研究所員）

※「図書紹介」欄への投稿を歓迎します。

本文（書名、著者名、発行所名を除く）四〇〇字詰原稿用紙で四枚半。本の写真、若しくは鮮明なコピーを添付してください。特に締切日は設けません。

（編集部）